《研究ノート》

# 研究史展望
# ―ロックフェラー財団の医療・公衆衛生活動と文化外交

平　体　由　美

## 研究が始まったロックフェラー財団の活動

アメリカの大企業のフィランソロピーに詳しい研究者であっても，ロックフェラー財団の活動内容を尋ねられて即答できる者はほとんど存在しない。音楽ホールでも作ったのだろうか，劇団や映画など文化活動に資金援助を行なったと聞く，大学に多額の寄付金を出したような気がする，貧しい者に経済的上昇のチャンスを与えて自企業の長期的利益を確かなものにしようとしたに違いない。どれもありそうなことである。しかしこのイメージは部分的に正しく，部分的に間違っている。

基本的にロックフェラー財団は，アメリカ合衆国とそれが所有する地域の人々の，安定した幸福な生活を促進し，また彼らの文明化を奨励するために，知識の開拓と啓蒙を行なうことを目的とすると述べている。[1]これを具体化したものが，ロックフェラー医学研究所の創立と運営，アメリカ南部教育支援活動，ジョンズ・ホプキンズ大学公衆衛生大学院への補助金，アメリカ南部を手始めとして中国やラテンアメリカ諸国，そして第一次世界大戦後のヨーロッパにおける医療と公衆衛生活動であった。

ロックフェラー財団の活動は，第二次世界大戦以後さらに多角化する一方で，医療・公衆衛生の分野からは撤退していくことになる。本稿は財団の前駆的活動が始まった1900年代から，1920年代戦間期の，財団の活動が医療・公衆衛生に集中していた時期を扱った研究を対象とするものである。

20世紀最初の20年は，アメリカにおいてのみならず世界において，医療と公衆衛生の大きなパラダイム変換が起きた時代であった。20世紀の初頭に一般大衆に細菌理論がようやく浸透し，清潔が養生の基本という理解の上に，殺菌とワクチン接種という新しい実践が人々の生活に入り込んできた。一般大衆のレベルにおいては古い考え方や実践が完全に駆逐されたわけではなく，むしろ専門家が提供する新しい情報をそれまでの実践にどのように接合するかが問題となっていた。

1910年代に入るころには疾病のデータ蓄積が進み，たとえばかつては「腹痛」とひとくくりにされていた症状に，様々な病名が冠され，細分化された治療が提供されることになった。19世紀後半から進行していた医師の専門職化は完成に至り，同時に看護婦や助産婦などジェンダーラインに沿った階層化も明確にされた。

視野を広げれば，植民地化された熱帯地域からヨーロッパ人にとっては新しい疾病が流入し，植民地統治の一環としても本国の防衛としても，そういった疾病への対応を迫られていた。これはまた欧米的医療実践が，それ以外の医療を非主流化・非正統化していくことのプロセスでもあった。当の欧米の医師が自らの実践する「科学的医療」――それさえも伝統医療や民間医療との勢力争いに決着をつけてから間もない時期である――の正統性を主張するのは当然として，非主流とされた中国や日本においても，「文明化」の達成度合をアピールする手段として欧米的医療実践が採用されたことも見逃すべきではない。

このような大きな転換が進行していた20世紀前半に，ロックフェラー財団は決して小さくない役割を果たしていた。国際保健部（International Health Division=IHD）は，鉤虫病やマラリア，黄熱病をコントロールするために，調査と治療を行い予防の重要性を説く医師とエンジニアのチームを結成し，アメリカ南部のほとんどの地域，そしてラテンアメリカやアジアへと専門家を派遣した。ロックフェラー医学研究所では黄熱病やインフルエンザなどのワクチン開発が継続的に行なわれていた。財団はまた，中国やインドにおける公衆衛生改善や医学教育に援助を行ない，戦間期ヨーロッパにおける結核のコントロールに協力した。[2]しかしその役割については，意義を検討することはおろか，何をしていたのかについての包括的な記述さえ数えるほどしか出版されてこなかった。

ロックフェラー財団の活動はなぜ研究者の関心をひいてこなかったのか。理由の一つとして，ロックフェラーのイメージの悪さが挙げられよう。貧しい出自の者が己の努力と才覚によって社会的成功を果たすのは，アメリカの国民神話の一つである。加えて成功した者がその成功を自分だけの利益とすることなく，何らかの形で恵まれない人々に還元することは，賞賛される行為であるはずである。にもかかわらず石油王ジョン・ロックフェラーの経済的成功は，アメリカの子どもたちが倣うべきロールモデルとは見なされていない。逆にロックフェラーは「泥棒貴族」とも呼ばれる恥知らずな強欲イメージを常に纏わされてきた。1913年の「ルドロウ大虐殺」を嚆矢とする一連の労使対立は，企業としてのロックフェラーに対する一般のイメージをさらに悪化させた。ロックフェラー財団が慈善活動の一環として関心を示した分野やその対象地域では，ロックフェラーの落とす援助金がはたして「クリーンな金」なのかが問題視された。

ロックフェラー財団の活動を20世紀初頭資本主義の勢力拡大という視点から描く研究は，強欲な資本主義貴族のイメージをそのまま投影している。たとえばE.リチャード・ブラウンは，ロックフェラー財団の活動が医療業界における権力と利益を独占するシステム形成を促していること，ひいてはコーポリット資本主義を維持する積極的な役割を果たしていることに注目した。[3]

別の論文ではさらに，住民の健康を増進することでロックフェラーにとって有益な形で経済的生産性を高めることになり，同時に植民地フィリピンにおけるアメリカの支配を強化するためのツールになったと論じた。[4]

これに対しジョン・エットリングは，ロックフェラー財団の前駆的活動である南部教育委員会とロックフェラー衛生委員会の記述を通して，活動の中心メンバーが一般に流布していたロックフェラーのイメージにいかに対抗したか，それらをかわすためにどのような戦略を選択したかという視点を提示した。ロックフェラーは，同時代からすでにイメージが悪かった。だからこそロックフェラーのフィランソロピーは，彼らの名前を前面に押し出すことを避け，常に地元の教育者や保健局への協力という形をとり，地域の人々を教育啓蒙することによってロックフェラー撤退後も教育や公衆衛生活動が継続されるよう構想していた。[5]

ロックフェラー財団がアメリカ国内におよぼした影響についての研究は，エットリング以後，鉤虫病コントロールをめぐる南部の人種関係や医療専門職化に特化していくことになる。これがロックフェラー財団がアメリカ史の分野で幅広い注目を集められなかったもう一つの理由となったのかもしれない。財団の活動は鉤虫病コントロールという南部史研究の中でも周縁に収斂していき，その意義については狭い範囲からのみ検討されることになった。[6]一方でブラウンが提示した資本主義的支配の覇者としてのロックフェラー財団像は，アメリカ国内ではほどなく研究者の関心を失う。

ロックフェラー財団への関心が再浮上してくるのは1990年代からである。エイズやエボラ出血熱などの新しい感染症が，感染症が主たる死因とならなくなって久しい産業諸国の関心を呼び起こした。続くSARSや新型インフルエンザをめぐる社会的不安の高まりは，感染症が過去のものでも，特定地域や特定集団だけのものでもないことを再確認させた。新しい病の情報をいかに伝達するか，現地への支援をどのように進めるかなど，具体的なノウハウが必要とされたときに参照されたのがIHDの活動であった。

学問の場でも関心は高まった。2000年代に入ると，すでに様々な議論が展開されていた帝国論に加え，ソフトパワーなど民間による文化外交への関心とも結びついて，ロックフェラー財団の活動はアジア，ラテンアメリカ，ヨーロッパにおいて注目を集めるようになった。しかしながらアメリカ研究におけるロックフェラー財団への無関心はいまだに続いている。

## 「支配された者」からの問い直し―帝国医療とロックフェラー財団

ラテンアメリカ史研究の分野では近年，帝国医療および文化的帝国主義の分野からロックフェラー財団，とりわけIHDの役割を再解釈する試みが次々となされるようになった。帝国医療とは，植民地に本国と同様の医療・公衆衛生制度を展開し，植民地住民の健康を向上させることによって，宗主国に対する住民の支持を拡大し抵抗を小さく抑える，支配の技法のひとつである。同時

に植民地に特徴的な疾病について研究を進め，支配層が免疫のない疾病に罹患するリスクを小さくし，また本国との移動を繰り返す官吏や貿易商人によって本国に疾病が持ち込まれた際に，何らかの対処を可能にするための準備としても重要な役割を果たしていた。[7]植民地の医療実践に様々な方法で介入したイギリスについての研究が蓄積される一方で，ロックフェラー財団の活動にも同様の視点から光が当てられるようになった。

マルコス･クエトは，IHDの主たる活動場所や，対応しようとした疾病を追跡調査することで，メキシコをはじめとするラテンアメリカにおけるロックフェラー財団の活動の目的が，アメリカの経済的・政治的利益の確保であったことを明らかにした。[8]たとえばIHDは1920年代，主に港湾都市を対象に，マラリアや黄熱病のコントロールに着手した。これにはアメリカとの交易が最も活発な都市が選択されていた。人々の健康を回復することは，彼らを市場経済に組み込むこと，都市インフラストラクチャー整備のニーズを高めビジネスチャンスを生み出すこと，そしてアメリカとの貿易に際して疾病を持ち込むリスクを下げることを意味する。IHDが先鞭をつけた保健活動は，冷戦期のアメリカ政府にとっては引き継ぐべき事業となっていった。[9]冷戦期においてアメリカの影響圏にあるラテンアメリカは，共産主義への支持が高まっているというリスクを抱えていた。貧困と疾病は社会変革へと人々を向かわせるからである。

こういったIHDによるラテンアメリカ諸国への帝国医療的介入に対し，メキシコがどのように対応したかを検討したのがアン・エマニュエル・バーンの研究である。援助物資や医学情報を引き出しつつ，メキシコ政府はアメリカによる公衆衛生政策への介入に抵抗を続けた。アメリカによる公衆衛生プロジェクトをも利用した「アメリカニゼーション」は，冷戦期より以前から展開されていたことを論じている。[10]

なお，アジアにおける帝国医療研究の立場から，見市雅俊がロックフェラー財団の活動に触れていることにも注目したい。これは日本語で読める数少ない文献の一つである。ロックフェラーによるアメリカ南部地域を対象とした鉤虫病撲滅キャンペーンは，「清潔」な「先進」国が対象地域に後進性と劣等意識を植え付けていくことで，帝国支配を受容させる重要な契機となったと，見市は結論づける。アメリカ南部の実践からはじまって，そこでの方法がその後のIHDへの活動に継承されていったこと，そしてロックフェラー財団が当初から海外進出をねらっていたことが議論されている。[11]

これらの研究が帝国主義バイアスを含んでいることは明らかである。その中でも注意を促したいのは，アメリカの帝国主義的影響力行使を強調することで，アメリカ政府の役割とロックフェラー財団の役割との違いを軽視もしくは無視している点である。政府が外交政策の一環として行う活動と，民間団体が行いうる活動の間には，大きな違いが存在する。民間団体は政府の外交政策を支持している場合もあるし，距離を置こうとしていることもある。政府はこのような民間団体の活動を，規制することもできれば放任していることもある。入江昭が指摘するように，非国家アクターの動向を無視しては，国際関係理解は歪んだものになりかねない。[12]ロックフェラー

財団が活発に海外展開を行なった1920年代は，アメリカ政府の対外姿勢においても，財団の政府や諸外国との関わりの持ち方においても，冷戦期とは異なっていた。政府と財団がどのような関係であったかについては，これからの研究において慎重に精査する必要があるだろう。

また，ロックフェラー財団の活動意図について，帝国主義的もしくは資本主義的利益追求のみに注目するのは，ロックフェラー財団が果たした役割を評価する上で，むしろ平板なものになってしまう危険性があることも指摘しておきたい。ロックフェラー財団の活動は，その形態が分散的であっただけでなく，活動分野を決定するという重要な局面に遭遇するたびに，ある意味行き当たりばったりに決定されている。一旦活動分野が決定されれば，多くの場合その具体的な方法はその分野に詳しい専門家に一任され，財団が出すのは資金だけということになる。ある特定の活動に注目し，そこに参加したスタッフの動きを調査すればするほど，見えてくるものは人種・エスニック関係の軋轢だったり，専門職の社会的承認をめぐるポリティクスだったり，カルチャーショックだったりする。[13]動き始めたプロジェクトを，予算以外でどこまで財団の幹部がコントロールしきれたか，今のところは不明である。このようなロックフェラー財団の性格を考慮すると，意図を特定することによって逆に財団の活動の大きな部分を無視することになるかもしれない。ロックフェラー財団の「隠された真の意図」がどのようなものであったとしても，検証可能な資料の形で出てくることはおそらくないだろう。となると，今後必要になってくるのは，財団の幅広い活動の詳細をつかみ，それらを大きな文脈の中に位置づけること，すなわち研究の基本に立ち返ることである。

## 意図を探る研究から意味を探る研究へ

ロックフェラー財団についての記述では，フィランソロピーを展開することに対するロックフェラー個人の意図が様々な形で検討に付されてきた。先に見たような，資本主義的利益を追求するための方策という解釈，アメリカの経済的帝国主義の先鋒という解釈の他にも，ロックフェラーのバプテスト信仰に注目するもの，専門家や一般市民が産業化によって歪んだ社会を改善するために様々な活動を行った20世紀初頭革新主義時代の精神性に答えを求めるものなど，様々ある。

一方で近年は，ロックフェラー個人の意図や目的にはあえて触れず，ロックフェラー財団が実際に行った活動や，行おうとして失敗した活動，考慮したにもかかわらず採用されなかったプログラムなどを分析することで，財団の活動の社会的意味を大きな枠組の中に位置づけようとする試みがなされている。医学研究における財団の位置，医療情報の広報団体としての財団，病の医療化に財団が与えた影響などの検討である。先に触れた，民間外交のアクターとしての財団の役割研究も，この枠組みのひとつといえるだろう。

レヴィ＆ツィルバーマンによる研究は，こういった試みの先駆である。後にWHOなど公的な国際機関に引き継がれていく国際的な医学疾病研究を，アメリカの一慈善団体が始め，軌道に乗

せたことの意義を検討する。彼らはロックフェラー財団の活動が国際的な医療活動にもたらした影響として，教育啓蒙，組織化，合理化，統一化を提示する。疾病データの集め方と処理の仕方，医療チームの組織化の方法，新たな症状に対する科学的アプローチ方法などが，ロックフェラー財団の医療チームによって統一されていく。その際に医療専門家だけでなく，医学研究者，行政官，政治家との連携が重要になる。これらは戦間期にロックフェラー財団および他の団体によって開拓された方法であった。黄熱病ワクチンの開発など研究所ベースの発見よりも，こういった行政－医療の連携こそが，後の公衆衛生行政の展開にとって重要な貢献となったと，レヴィ＆ツィルバーマンは結論づける。[14]

ロックフェラー財団が何をしたのか，どのような影響を与えたのかについて，ベンジャミン・ペイジは科学による文明化の意義を世界に広報することに成功したと論じている。彼はロックフェラー財団の教育援助に注目し，それがアメリカ，中国，ブラジルをはじめとして，オーストラリア，インド，南アフリカにも活動範囲を広げ，医学生や公衆衛生行政官，研究者の交流を活発化し，科学的医療の浸透を促したとする。同時に，死亡率の減少は経済発展に伴う住環境や栄養状態の改善こそが主たる原因であり，科学的医療の浸透はあくまでも補助的な役割しか果たしていなかったのではないかという指摘を取り上げ，ロックフェラー財団の内部ではこういった問題についてはほとんど議論されていなかったとして，貧困問題についての財団の居心地悪げな姿勢に読者の注意を促している。[15]

これらの研究のように，アメリカ政府による公的な外交とは独立して，医療と公衆衛生をキーワードに世界的標準化を推し進めている原動力の一つがロックフェラー財団であったとの位置づけは，二つの疑問を導く。

第一に，レヴィ＆ツィルバーマンが言うところの合理化と統一化，ペイジが言うところの科学による文明化というのは，どの程度アメリカ化を意味しているかという問題である。ロックフェラー財団が推し進めたのはアメリカ的方法論，アメリカの医療知識，アメリカの価値観の教育啓蒙だったのだろうか。それとも国際的な活動に付随する現地での文化的軋轢や，専門家の国際交流などを通して練り上げられた，何らかの――西洋医学中心主義なのは避けられないにしても――コスモポリタンな価値観と方法論の教育啓蒙だったのだろうか。クエトや見市はアメリカ化であるという結論を出すかもしれない。一方，バーンが詳述したメキシコにおける広報・指導と抵抗を考えるに，IHDの活動はより柔軟に組み替え対応することができる組織的環境の中にあったのかもしれない。

第二に，前に提示した疑問と共通するが，アメリカ政府とロックフェラー財団は多少なりとも協力し合っていたのか，それとも財団はアメリカ政府と独立に活動を展開していたのか。1913年のロックフェラー財団設立にあたって，財団側はアメリカ合衆国議会からのチャーター獲得を試みた。これはアメリカ政府の公認を得ることで財団としての活動の正当性を高めると同時に，アメリカ政府からの何らかのコントロールを受けることも意味する。しかし財団は議会の同意を得

ることができなかった。アメリカ政府とロックフェラー財団は，最初からどこか緊張した関係にあったのである。[16]一方で，財団からはかなりの個人がアドバイザーとして合衆国政府に協力している。たとえば先に著書を挙げたレイモンド・フォスディックは，第一次世界大戦時パーシング大将のブレインの一人だった。表だっての協力はしないにせよ，アメリカ政府とロックフェラー財団の間には，何らかの了解と承認があったはずである。

この点についてカタリーナ・リーツラーは，カーネギーとロックフェラーの両財団とアメリカ政府の文化外交についての研究において，戦間期の特にドイツ，イタリア，日本が国際連盟から脱退する緊張した局面で，財団側が脱退した国の研究者を積極的に受け入れ，汎ヨーロッパ的頭脳結集をはかった事実を挙げ，アメリカ外交の補完的な役割を果たしていたと主張する。一方で，財団側は政府機関との関係をできるだけ公にしないよう注意を払っていた。これは政府とのつながりがあるという事実が，財団にとって利益になるのか足かせになるのか判断が難しい問題だったことを意味する。[17]

アメリカの文化外交は冷戦期に始まったものではなく，また政府主導で，政府が民間の活動を監視しつつ行なわれたものでもなかった。1920年代のロックフェラー財団の活動を分析することは，その原型の一端を明らかにする作業ともなるだろう。

アメリカを研究対象とする研究者がロックフェラー財団について忘却したままであった一方で，ラテンアメリカやアジアをフィールドとする研究者は財団の活動についての研究を蓄積しはじめている。今回取り上げた研究は，筆者の言語上の制約から日本語と英語で読めるものに限られているが，スペイン語，フランス語，中国語での研究ではおそらくより豊かな展開がなされていることだろう。逆に言えば，より包括的なロックフェラー財団理解を推進するためには，アメリカの政治システムや価値観，人種・エスニシティ感覚やヨーロッパに対する複雑な感情を理解するアメリカニストによるロックフェラー財団研究を，これから提示していく必要がある。そうすることによって，ロックフェラーやアメリカを超えた，医療史，文化外交史，帝国史を横断的に考える足がかりが，またひとつ生まれてくることになるだろう。

**註**

1　Raymond B. Fosdick, *The Story of the Rockefeller Foundation*, (New Brunswick, NJ: Transaction Publishers, 1989), 15.

2　ロックフェラー財団の，とりわけ初期の活動については，先述のRaymond B. Fosdickの他，John Farley, *To Cast Out Disease: A History of the International Health Division of the Rockefeller Foundation 1913-1951* (New York: Oxford University Press, 2004) が詳しい。

3　E. Richard Brown, *Rockefeller Medicine Men: Medicine and Capitalism in America* (Berkeley: University of California Press, 1979), 4.

4　E. Richard Brown, “Public Health in Imperialism: Early Rockefeller Programs at Home and Abroad,” *American Journal of Public Health*, 66 (9), 1976, 900.

5　John Ettling, *The Germ of Laziness: Rockefeller Philanthropy and Public Health in the New South* (Cambridge: Harvard University Press, 1981), 84.

6　アメリカ南部史から見たロックフェラー財団（ロックフェラー衛生委員会）の活動については，たとえばAllen Tullos, "The Great Hookworm Crusade", *Southern Exposure*, 6 (2), Summer 1978; Alan I. Marcus, "Physicians Open a Can of Worms: American Nationality and Hookworm in the United States, 1893-1909," *American Studies* 30 (2), 1989; William A. Link, *The Paradox of Southern Progressivism, 1880-1930* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1992). など。

7　帝国医療については，見市雅俊他編著，『疾病・開発・帝国医療――アジアにおける病気と医療の歴史学』東京大学出版会，2001年，奥野克巳『帝国医療と人類学』春風社，2006年など。

8　Marcos Cueto, ed., *Missionaries of Science: The Rockefeller Foundation and Latin America* (Bloomington: Indiana University Press, 1994).

9　Marcos Cueto, *Cold War, Deadly Fevers: Malaria Eradication in Mexico, 1955-1975* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2007), 62－63.

10　Anne-Emanuelle Birn, *Marriage of Convenience: Rockefeller International Health and Revolutionary Mexico* (Rochester, NY: University of Rochester Press, 2006).

11　見市雅俊「病気と医療の世界史――開発原病と帝国医療をめぐって――」見市雅俊他編著，『疾病・開発・帝国医療』第１章。ただし，ロックフェラー財団が当初から海外進出を狙っていたという記述（36頁）には注意が必要である。たしかにロックフェラー個人は早い時期から中国に関心を示していたし，財団としては海外進出をせざるを得なかった。財団設立に当たって1913年の合衆国議会からのチャーター取得をめぐる混乱と取得失敗により，ロックフェラーが国内でのフィランソロピー活動に限界を感じたからである。これは同年に発生したコロラド州ルドロウのストライキの処理のまずさが遠因とも言われている。一方で，見市が議論する南部における鉤虫病撲滅キャンペーンは，ロックフェラー財団が財団となる前の活動（ロックフェラー衛生委員会1909－1913）である。この時点でのロックフェラー衛生委員会は，海外進出よりもむしろアメリカ南部における幅広い活動を想定していた。Fosdick, 14－29.　特にロックフェラー衛生委員会の会長ウィクリフ・ローズは，財団化に当たって南部ではなく海外に目を向けることなることには批判的であった。Farley, 29－31.

12　入江昭「アメリカの対外関係におけるフィランソロピーとシビル・ソサエティの役割」，山本正編著『戦後日米関係とフィランソロピー――民間財団が果たした役割　1945－1975』ミネルヴァ書房，2008年。この論文集ではロックフェラー財団の記述はあるが，論文集の焦点が教育研究における日米文化交流に当てられているため，本稿が扱う医療，公衆衛生分野については対象外となっている。

13　拙稿「アメリカ南部公衆衛生行政の展開――ロックフェラー衛生委員会と20世紀初頭の鉤虫病コントロール」『アメリカ史研究』第32号，2009年。

14　Ilana Loewy and Patrick Zylberman, "Medicine as a Social Instrument: Rockefeller Foundation, 1913-45," *Studies in History and Philosophy of Biological and Biomedical Sciences*, 31(3), 2000, 366－67.

15　Benjamin B. Page, "Evaluation and Accountability: with a case study of the Early Rockefeller Foundation," in Benjamin B. Page & David A. Valone, *Philanthropic Foundations and the Globalization of Scientific Medicine and Public Health* (Lanham, MD: University Press of America, Inc., 2007), 8－9.

16　チャーター取得失敗の経緯はFosdick, *The Story of the Rockefeller Foundation* に詳しい。第2章のほぼ全てを使って説明している点に，初期の運営メンバーがいかにこの問題を重要視し，また残念に思っていたかがうかがえる。

17　Katharina Rietzler, "Before the Cultural Cold Wars: American Philanthropy and Cultural Diplomacy in the Inter-war Years," *Historical Research*, 84 (223), February 2011, 154－155, 162－164.

（ひらたい　ゆみ　札幌学院大学人文学部教授　アメリカ政治史）